

春季福音特別集会（2）（保田）

恵福なる哉霊の貧しき者

——マタイ伝5章1～14節——

1973年3月22日

小池辰雄

本願道 ナツシング イズ オール 我は真の空気なり 悲しみの極致 キリストの実存に渴
 く者 自由と愛は相即する二面 花を見れば花となる 我は水車なり キリストと同質の者
 汝らは世の光なり 祈り

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。
- 12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。
- 13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。
- 14 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。

●本願道

今、司会者が言ったとおり、

「何だか知らないけれども、何がどうなつても、動かないものがあるんです」と。全くその通りです。我々のこの御霊のバプテスマを受けた信仰というものはそういう



ものです。相対的な自分がどうなろうと、人がどう思おうが、そんなことに関わりない。これがその本願の効力が来ている証拠なんです。私はこの仏教の「本願の効力」という言葉が非常に好きで、今度、『この道を往く』（獨協学園図書館リンドンバウム叢書）でも書いた、あの二番目の詩はもと「白熱の魂」という題だったけれども、これを「本願道」と改題した。終わりの方の文句も多少変えました。本当に我々はもう本願道の他に道がなくて、本願道という道は、人間が限定できる道ではない。

「これが本願道（ほんがんどう）」

なんて言える道ではない。本願道は常に新しく上から示されるところの、またひっぱり回されるところの道です。しかも、これほど確かな道はない。そういう道なき道です。

今日は、皆さんが一番よく知っているところのマタイ伝5章、山上の垂訓。申し上げている通り「山上の大告白」であります。決してただ「垂訓」というのではない。……

3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

この一句が本当に化体し、血となり肉となつたらば、もうキリストの言葉が全部読める。それが本当に私の救いの、御霊の信仰の土台石なんです。もうみんな知っている通りだけれども、しかし、私はまた語りながら常に新たに、また常に深くされていくわけです。

3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。

6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。

8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。

10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。

11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。

12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、

斯く責めたりき。

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後は

用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。

14 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。

「いよいよ、

「幸福なるかな」

という内容が八つも出ている。この世の幸福とこの「幸福なるかな」は違うんです、同じ「幸福」という字ですけれども。



「恵まれたるかな」
 という、恵まれたる福、「恵福」です。もし当てるなら、

「恵福なるかな」

ということ。「マカリオイ」(μακαριοι)という字です。ドイツ語でいうと、「ゼーリツヒ」(selig)であって、「グルックリツヒ」(glücklich)ではない。みんな幸せを望む、一般の人たちが望んでいるのはこの「幸せ」です。よく「幸せ」ということを言う。けれども、あなた方は幸せである必要はない。この「恵まれたる者」「ゼーリツヒ」なんです。天的な幸いと地的な幸いととは違う。地的な幸いは移りゆく、はかないものです。しかしながら、天的な幸いは移りゆかない。いよいよ栄えゆくもの、いよいよ明るきものです。どうぞ、この世の幸不幸でもつてどうのこうのということではなくて、本当にキリストの言う

「恵福なるかな、恵まれたる者よ」
 と言うところの事態になっていただきたいわけです。

● ナッシング イズ オール

一番先に出てきたのは、「靈の貧しい」ということ。普通は、精神的に豊かであるとか、「あの人は精神的にどうだ」

とかいろいろ——私なんか普通のご連中には、すぐ私は精神病者でなくて「精神何とか」みたいに思われるけれども——およそ判断がちがってくる。私は魂、靈、心、それが貧しい、何もない。ということとは、相対的な人間小池がそうだといいのではない。

キリストが誰よりも靈が貧しかった。誰よりも心が貧しかった。魂が貧しかった。イエスは本当に神さまの前に、主の前に平伏ひれふしていた。

「私は何でもありません、私は何でもない、あなたが一切です」と。あなたが一切である。

「汝はわが全すべてなり」
 というとき、

「私はゼロですが、あなたは全てです」
 というのは、

「オール オア ナッシング」(all or nothing 全すべてか無か)
 ではない。

「ナッシング イズ オール」(nothing is all 無は全すべて)
 なんです。こういうことは言わないらしいね。「オール オア ナッシング」ということをニーチェが言う、もう大いにそれでいい気になつていけるけれども、私はニーチェ以上なんだから、間違えないでください。「ナッシング イズ オール」と、

「何にもありません」



と、そう言ったのはキリストなんだから、私ではないんだ。イエスがそのことを実践してくださったから、私たちは、

「ああ、そうだ、そうだ」

と言うだけの話。イエスは本当に、何も言えなければ、何もできなければ、何も教えなければ、ひとつも善くない。キリストは善くないんだ、ひとつも。ちゃんとキリストが言っているらっしゃるんだから。普通の神学者や牧師さんは一体何を考えているかと思う。

「我によらずば何事もなしあたわず」

と、何もできないキリストがなぜそんなことを言ったかというところ、キリストは

「父によらずば、我何事もなしあたわず。何事も言うあたわず」

ということを担当に彼は実践しておられた。そこに生きておられた。神一切であられた。そのキリストであるから、神を慕っているから、

「私によらなければ、何もできない」

ということをキリストは仰った。それは、ゼロにおいて無限大がきているから。そこでキリストは私たちにそう言った。

「我によらずば何事もなしあたわず」

「我によれば何事もなしあとう」

と。キリストがなしたもう。本願道というのがこれなんです。本願道というのが正にそうです。この山上の大告白の第一言が本願道を取りなしているわけです。

「霊が貧しい」

という。ところが、霊が貧しくないんだ、みんな。みんな何もかであると思っっている。そして、自分というものを何とか価値だと思っっている。価値なんかありはしない。無価値なんです。

●我は真の空気なり

この空気は無価値です。誰もお金を出して空気を吸っついでいやしいない。誰も空気はただで吸っついでいる。牢屋の中にいようが。ところが、これがもしなくなつたら、直ちに死んでしまう。だから、

「無価値であるものが無限価値だ」

ということが、

「キリストは空気なり」

と言えがいいんだ。イエスは空気なり、空気はイエスなりと。イエスに囲まれているではないか。このイエスに囲まれて、イエスを吸っついでいるわけではないか。空気を吸っついでいるんだから。キリストは本当は、

「我は葡萄の樹なり」



なんて仰らないで、

「我は空気なり」

と仰ってくださいたらよかったんだな。私の聖書にそう書いておこう、あそこの「我は葡萄の樹なり」というところの横に「我は空気なり」と。もう最高だな、これは。キリストは空気である。

「我は真まことの空気なり」

と。みんな空気を吸っているけれども、

「私は真まことの空気だ」

「そうだ、イエスが真の空気だ。我々が吸っている空気は本当はキリストだった」と。空気に囲まれ包まれ、吸い込んで、血はきれいにされて生きているんですよ。これは最高の真理だね。それで空気は只ただだもの。そういった、この無即無限の……(異言)……、このキリストの中に入り、それでも、

「我は神のうちに生き動きまた在るなり」

なんてのは全くそれですよ。

「我はキリストのうちに生き動きまた在るなり」

と、全くその通り。キリストの中に我々は生き動きまた在る。この空気なんだから、キリストは。我々の祈りはもう直ちに呼吸なんです。霊が、心が本当にキリストを呼吸する。

「ところが、お前は心が貧しくないものだから、その貧しくない心を私がみんなすつ飛ばしてしまおう。すつ飛ばして、お前は本当に自分は何ものでもないということを宣言させてやるぞ」

と。これがまた、本願道が何をキリストで示したかというところ、十字架であつた。十字架ですつ飛ばされる。十字架でもって解決のつかない問題は一つありませんよ。あなた方は、入学試験問題とか、結婚問題とか、就職問題とか、いろいろ問題があるね。しかし、その根底はキリストの十字架が全部解決している。

「過去にどうであつた。今現在はこういうゴタゴタがある。将来もこういうゴタゴ

タがありそうです」

とか、何をぬかすかと。キリストの十字架でもって完全にその中に入って——それは段々、申し上げますから、あまり結論を言うのを早すぎるから——イエス・キリストの十字架によつて我々はあるがままにして既にすつ、飛んで、(問題の根底は全部解決して)いる。いいですか。

魂の真理は、そんな「 $2+2=4$ 」ではないんだから。

「 $2+2=100$ 」

なんだから。それくらい、魂の世界の真理の質の物凄さというものをもつと受けとつてく
ださいよね。

霊は十字架によつてすつ飛んで、すつかり貧しくなりました。



「現実はまだ私はこうです」

と、そんなことは全部すつ飛んでしまう。「あるがままで、すつ飛んで(全部解決して)いる」という凄惨な矛盾構造というか、逆説構造がわかりますか。……

「聞く耳あるものは聞くべし」

と、キリストがそういうことを仰る。ですから、もうあなた方は涼しくしようがないでしょう。おなかの中が涼しくなる。

「霊が十字架ですつかり貧しくされて、みんな無くなる。ああうれしい」

と。即ち、

「天国はその人のものなり」

と。天国というのは、勿論キリストにとっては、父が天国です。我々にとっては、このキリストが即ち天国、御霊が天国です。

「御霊が即ち汝のうちにあり」

と、こう響いてきた。だから、この十字架と聖霊の現実が、復活のキリストが本当に私たちの中に一つになって生きているのが、この山上の垂訓の第一言です。イエスは即ち霊がすつかり神の前に貧しい方であつたから、天国即ち神が彼のうちにあつて、

「父と我とは一つなり」

というのが、この

「幸福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という、本当の内容なんです。もう私はこれで驚いてしまった。そして本当に私は平伏してしまつたわけだ。

「恵福なるかな、わが十字架によつて汝、霊貧しくされた者よ。天国即ち御霊

の我、汝のうちにあり」

と。これは「本願道」の詩の中にも書いてある。

〔註…:「……起てよ、福音の兄弟姉妹よ! / キリストはねんごろに、/ われらの心腸に呼びかけ給う / 「汝わが十字架に贖われて、/ 霊貧しく、無者とされた者よ! / 天国、聖霊の我汝の中にあり。 / 無者よ、無限無量者よ! / わが霊による汝、白熱の魂よ! / 祈りせよ、汝が悲願霊願をもて / わが本願に祈り入れよ! / わが霊言、わが聖霊汝の中に / 化体して力となり生命となれ。 / 使徒らの如き聖霊の器を / 我は全地のここかしこに起こす。 / わが本願を身証せよ、汝! ……」(詩「本願道」より)〕

時々、よく熟読してくださいよ。そして、本当に血となし肉としなくては。

「ああ、先生の詩はここにあります」

ではない。

「わが腸はらわたの中にもうそんなものは溶けてしまつています」

ということになっていただきたい。この第一言が本当に化体かたいし、瞑想し、祈る、いよいよ



深く。さつき讚美歌320番で歌ったでしよ、

「主よみもとに近づかん、

のぼるみちは十字架に

ありともなど悲しむべき」

と。あの

「のぼる道は十字架であろうとも悲しまない」

ということが、本当に私は言えるかと瞑想しているうちに、歌えなくなってきた。私たちが十字架の道を進んで、本当に「ハレルヤ！」と言うだけの魂の実存がきているかということになりますと、それは本当に真剣に祈ってないと。そして、それは力りきんだってダメです、御霊が来てなければ。いたわりの白熱的な御霊がくれば、それは本当に歌える。白熱的な御霊がこないで、あの「主よみもとに」の第一番は歌えないんだ、本当は。

● 悲しみの極致

「幸福なるかな悲しむ者、その人は慰められん」

「慰められん」とは、誰に慰められるかということ、これはみんな

「私が慰めるぞ」

ということですよ、慰めてくださるのはキリストですから。聖書の言は、キリストをサブジェクトに、主語にして読んでなかったら、本当に読めない。またどんなに他のもので埋め合わせたって、埋め合わせがつくようなものではない。

「幸福なるかな悲しむ者、その人は私に慰められるぞ」

ということ。それは人も慰めてくれるよ、非常に親切な人は。それもありがたい。けれども、人の同情よりも、キリストの慰めはもつと深い。人から慰めを受けてはいけないというのではない。けれども、キリストの慰めは、徹底的に悲しみを喜びに変える慰めです。

「悲しみをよろこびに喜ぶ」

というのは、イザヤ書の60章に出ている。涙を笑いに変える。全部これは、マイナスを全部プラスに変えてしまう。

「幸福なるかな、悲しむ者。その人は私が慰めてやるぞ」

と。まあ人間だから、いろいろな悲しみがあるよ。これもやはりキリスト自身が体験している。イエスも深い悲しみ、悲哀の人です。誰もイエスを慰めてくれることができない。神に慰められた。神さまにキリストはその悲しみを、「世界的な悲しみ」(Weltschmerz)を、誰も感ずることのできないような悲しみを慰められた。キリストは十字架への道である。

「誰も私をわかってくれない。弟子たちもわかってくれない。ついに自分は一人で十字架にかかる」

と。十字架への道はキリストの悲しみの極致なんです。



「神さまと一緒にこんなに生きているのに、なぜ私は十字架につかないといけないんですか」

と。それは贖罪の贖いのため。それは神さまが慰めてくださるのだが、しかし、最後にキリストは何と叫んだか。

「わが神、わが神、なんぞ私を棄てたか。どうして私を棄てなされたか」

と。まあ非常な言葉です。しかしながら、あのキリストの叫びの中には神の義が立っている。キリストの十字架のあの叫びは、

「神よ、私はあなたを一切としていた」

このことが義でしょうが。神一切とすることが義なんです。いいですか。義とは何ぞや。神一切とすることなんです。神の御意を然りと言うことが義である。

「神の御意を然りとして、自分自身を否として、生き抜いた私をなぜお棄てになる

か、神の義が立たないではないですか!」

というのがこの天地を貫く義の叫びですから。しかし、その義が立つところに、立ちながら、しかも神の憐れみがかかってくるところに十字架があるわけです。義と愛の正に交差しているところが十字架ですから。悲しみの極致を知っているのがキリストです。それはまた本当に神に慰められる。

「われ汝を愛す。汝はわが愛しむ子なり」

と、神さまのその御声をバプテスマを受けた時にキリストは聞かれた。即ち神の深い慰めがきている。だから、

「私はお前を慰めてやるぞ。どんなに悲しんでも、それで決してへこたれるな」

と。いや、深い悲しみのある人は逆に——クリスチャンほど深い悲しみを持っている者はないはずなんです——しかしながら、クリスチャンほど輝かしい喜びを持つ者もない。でありますので、いいですか、この山上の垂訓には、クリスチャンのあらゆる面がよくその八つの角度から書いてある。そのことに私は今朝気がついた。……

●キリストの実存に渴く者

5 幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。

優しい人、従順な人。今およそ柔和な人が少なくなりました。何か威張りくさったような、我が強いやつばかりです。

私は、自分でいうとおかしいけれども、非常に柔和な人間でね(笑)、小さい時からとにかくお父さんやお父さんはいなかったか——お母さんや兄さんの言うことはよく聞いて、およそ反抗したことがほとんどない。まあ弱虫だから、ひとつはね。従順な、人の言うことをよく聞いて、何かすぐ自分の意見を言ったり何かしないで、簡単なんだね、僕はそもそもすべて。



「幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣^つがん」

今、威張っている奴、権勢の奴、いろんな謀略をする奴がある。買い占めをしたりいろんなことをしている。地を持つているけれども、しかしながら、そんなものはみんな取り上げられてしまつて、本当に地を嗣^つぐ者は今何も持っていない者です。柔和な、虐^{しいた}げられた、損ばかりしている者、ひとつもお金貯まらない者(笑)。そういう要するに地上でもつて一向幅のきかないのがやがてその地を嗣^つぐことになる。「柔和なる者」というのは、従順なる者と同じ意味です。

キリストが正にそうです。その象徴としては小羊。小羊が柔和なる者の象徴です。だから、キリストのことを「羔^{こひつて}」というでしょ。神に対して従順である。常に言うことは、

「私の心ではない。あなたの仰ることを守つていきます」

と。まあ、「民主主義の、自由主義の」というのはみんな、本当の意味においての民主も、自由もないものだから、みんな履き違えをしてしまつて、困ったもんだよ、この日本は。孔子の道徳が捨てられてしまつて、国には中心になるものが一つもない。教育も本当に教育者にそれだけの確信もない。

6 幸福なるかな、義に飢え渴^あく者。その人は飽^あくことを得ん。

この「義」はもちろん神の義です。神の義に飢え渴^あく者。神の御意を本当に受けとつていこうとして、天地を貫くところの縦の線に飢え渴^あく者。それは飽^あくことを得ん。義と愛というものは離^はれすることができない。義は道徳の一番根底ですから。この世の中が何とか行っているのは、やはり義の線がとにかくあるからなんです。それは良心が知^しっている。良心というものは義に対してはひとつの感覚を持つ^もっている。

「あんなことをして良くないじゃないか」

ということとはみなこの義の角度から出てくるわけですから。それがしかし、人間的な相対的な正義というのではなくて、

「神の義に飢え渴^あく者」

は絶対的な質のものです。これは観念的に言うのではない。

イエス・キリストを見てください。キリストという方の言葉、これは義に貫^ついている。義が貫^ついているし、また愛が貫^ついている。キリストのすることなすことはみな、義と愛による渾^{こんぜん}然たるものです。だから、福音書にきて、キリストの言葉と行為を見てごらんください。すべて義と愛が渾^{こんぜん}然としてい^るから。この義と愛の渾^{こんぜん}然としてい^る具体的なキリストの言行、実存、これに飢え渴^あいてください。もつとはつきりいうと、

「福音書のキリストの言行、キリストの実存に渴^あく者は飽^あくことを得ん」

と。正にそうだな。これはいい言葉だ。キリストの実存に飢え渴^あいて、聖書に来て

「ああ素晴らしい、ありがたい!」

と、そしてその中に食いついていく。そうしたら、飽^あきますよ、本当に。どんな御馳走よ



りかはるかに御馳走だからね。それが
「飽くことを得ん」
ということ。

●自由と愛は相即する二面

7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。

ある意味において山上の垂訓の——第一言はそうですけれども——内容的に言いますと、

「憐憫ある者、その人は憐憫を得ん」

は山上の垂訓のハートです。この八つの言葉のハートはここなんです。

孔子の言葉でいうと「恕」になる。おもいやり、深い思いやり。

「孔子の教えは煮詰めたら何か？」

「恕なるかな」

と言った。思いやりです。へブル書の4章に、

「キリストは深い思いやりがある」

と書いてある。「思いやり」という字があ、「恕」です。「惻隱の心」というね。孟子が、

「惻隱の心なきは人に非ざるなり」

と言った。思いやりのないのは人間ではないぞと。思いやり、本当の御霊の愛であり、人の悩みを悩みとする、その思いやりです。

パウロの言葉、コリント前書9章19節から、

「¹⁹われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら

凡ての人の奴隷となれり。」

マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』の命題は、ここの言葉から出ている。

「クリスチャンはすべての人に対して自主であるが、またすべての人に対して奴隷である」

という、あの二つの矛盾した命題はこの句から来ている。キリスト者は神・キリストに直結しているから、一切の者に対して自主で自由である。しかし、自主であるが、一切の人たちを本当にこの自由なる世界に入れるために、自分は奴隷となる。「奴隷となる」というのは「仕える、奉仕する」ということです。

「奴隷」という言葉はちよつと悪いんだよな、言葉が。奴隷は何か屈従している。奴隷は主の命令に仕方なしに、鞭で打たれるから、屈従しているようなところがあるけれども。そうじゃないです、ここの「奴隷」という意味は。

「エホバの僕」という、キリストのあの僕、即ち神さまに従順に従う。しかもそれは人に對して、自主なる者が自ら進んで仕えるということは、愛でなければ従えない。自由は、罪からの自由であると同時に、今度は愛への自由を持っている。愛への自由ですから、こ



れは人を本当に、

「人のためにしてあげましょう」

とあって、荷物を担ぐわけだ。皆が担ぐのを嫌がっている荷物を担ぐ。荷のない体勢です。その荷のない体勢が「奴隷」なんです。即ちそれは愛なんです。

だから、自由と愛とは相即する二面です。もし愛に働かない自由だったら、そんな自由は勝手気儘きままな自由だ。魂が自由であるということは、何ものにも囚われないが、限りなく愛をもって動いていく者が本当の自由です。マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』がこの二面をはつきり言っている。これはパウロのこの言葉から来ている。

●花を見れば花となる

20 我ユダヤ人びとにはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが為なり。

ユダヤ人は、分からない分からずやだが、この分からずやを何とか得んが為なりと。自分もその分からずやの一人だったんだからね、このパウロは。そしてキリストを迫害していた。だから、あの律法に堅いユダヤ人を——もう律法を金科玉条にしているわけだ、ユダヤ人は、今でもそうなんだ——得んが為なりと。

「ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが為なり」

と書いてある。「ユダヤ人とならんがために」とは書いてない。ユダヤ人の如くなって、——またユダヤ人に戻ろうなんていうのではない——

「ユダヤ人を得んが為なり」

という。これをキリスト者として逆に引っくり返さんがために、

「これユダヤ人を引っくり返さんが為なり」

ということ。

律法おきての下にある者には——律法の下に我はあらねど——律法の下にある者の

如くなれり。

パウロは、自分はどう律法の下ではなくて、キリストの恵みの下にあるけれども、自分も律法の下にあるが如くにして、そして同じ所に降りて行くんです。上から高所から「こうなる」なんて言っているのではない。自分もその中におりてきて、同じ気持になる。同じ気持になりながら、それで自分がお終いではないよ、相手の所に立って、

「でも、こうなんだよ」

とあって、段々そいつを別な方へ引つ張っていくわけだ。

これ律法おきての下にある者を得んが為なり。21 律法なき者には——われ神に向か

いて律法なきにあらず、反かえつてキリストの律法の下にあれど——律法なき者

の如くなれり、

これは異邦人に対してだ。



これ律法なき者を得んがためなり。
異邦人を得んがためである。

22 弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んためなり。

悲しめる者には悲しめる者となつて、これ悲しめる者を得んがためなりと。そういうわけだよ。頑かたくなる者には、頑なる者の如く成つて、自分も頑固がんこのようになって、そして相手を砕いてしまう。このことができるようになったら、これは本ものですよ。

我すべての人には凡すべての人の状さまに従えり、これ如何いかにもして幾許いくばくかの人を救わんためなり。

「すべての人」なんてパウロは言っているけれども、ここで本当に救われる人はやはりそうはいないけれども、とにかく本当は全ての人を救いたいんだ、パウロだつて、万人を。このコリント前書9章22節は大事な句です。

「我すべての人には凡すべての人の状さまに従えり、これ如何いかにもして幾許いくばくかの人を救わんためなり」

これはパウロの愛の悲願です。

23 われ福音のために凡すべての事をなす、これ我も共に福音あずからんと為なり。」(コリント前9・19、23)

すべての事をやりながら福音にあずかっている。いいですか。こういうのが本当に慰めを人に与えることのできる人です。花を見れば花となる。風を見れば風となる。

「ああ風はいやだなあ」

なんてではない。自分も嵐になったらいい。風のない時には、無風となれば無風になる。暑い時には暑くなる。

「心頭滅却すれば火もなお涼し」

というけれども、火の中に入ったら火の如く熱くなればいい。風を見ても風となる。反対みたいなことを私は言うけれども、そうなんだよね。水の中に入れば水となる。波の上に来たら波となる。そうしたら酔わないですよ。船でもって酔うだろ。あの酔うのは、「酔うまい」と思ったら酔ってしまう。波と一緒に成つていけばいい、波の姿に。波が下へいけば自分も下へいけばいい。あの呼吸がわかると酔わない。本当だよ、今度やつてごらん。そういうように自由自在な魂にならなければダメなんだ。

山上の垂訓の秘訣は実はそこにあった。キリストはみんなその人たちのものになつてしまふ。そして、そいつをみんな救い上げてしまふ。自分に同化してしまふ。

● 我は水車なり

もう一つどこかにあったね、

「持つてゐるけれども持たないごとく。持たざるけれども持てるがごとく」



なんていう言葉が。コリント後書6章8節あたりから、

「8また光榮と恥辱はずかしめと悪名あしきこえと美名よきこえによりて表す。我らは人を惑す者の如くなれども真まこと、9人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、懲こらさるる者の如くなれども殺されず、10憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有もたぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」(コリント後6・8)

10) さっきの9章のあの境地をつかんでみると、今度は6章のこういう境地がまた出てくる。これは同じことなんです。同じことの画面なんです。

本当の自由というのはこういうことに対して本当に柔軟心を持つていることです。道元の言っている「柔軟心」というのはこれなんだ。本当の意味でこの柔軟な魂。それに応じながら、すぐそいつに臂鉄砲ひじをくらわせるようなものではない。それに応じながら、そいつをやんわりと抱えてしまったり、どっこいといつて荷なつてしまったり、クリスチャンの心はそういう心であるわけだ。それが本当に「憐れみあるもの」です。

「憐れみある者は憐れみを得ん」

という。そういつた柔軟心がこの「憐れみ」という言葉でまた別に言われるわけだ。柔軟心をもつてみな、

「ユダヤ人にはユダヤ人の如く、弱き者には弱き者の如く、頑なる者には頑なる如くなる」

というわけで、その中にその同じ現実に入れて、相手を別な現実へもつていく。

サマリヤの女が水を汲みに来た。そうしたら、キリストが

「私にも飲ませておくれよ」

と言った。やはり自分も同じ渴しているところに持つていったんだ、キリストは。「私にも少しください」と。けれども、

「私の与える水をお前が分かつたら……」

と、今度は逆なことを言い出した。そして、そのサマリヤの女は驚いてしまった。

「では、その水をください」

と。「水をおくれよ」と言つたキリストに「水をください」ということになった。これは同じ水だけれども、別な水だ。水の質がちがう。そして、キリストが預言者であることが分かつてしまつたら、驚いて「みんな来てごらん」と。私の詩の中にも書いてある。

「来てごらん、この人はとんでもない人だ」

と。

〔註…〕……かつてヤコブの泉のほとりで、／愛の霊泉をもつた人に、／出会つたサマリヤの女のように、／私も叫ぶ、「来てごらん！」と。／人々よ、福音書のイエスの許に／あるが



ままの姿で来たれ！／「我は道なり真理なり生命なり」／かく告白した実存者に／体あたりして降参すれば、／キリストという十字の門が／開かれてあるを見出す。……」(詩「本願道より」)

「そういうのが、本当に相手のところに自分を持つていって、相手を救い上げていく。これが「憐れみある者」なんです。

憐れみある者は神さまから本当に憐れみを得る。憐れみは、私たちは本来は持つていない。私たちはキリストから憐れまれたから。君たちにどんな問題があるうが、キリストの憐れみの中に入つてごらん。問題はありながら、その問題は既に解けてしまつていゝる。

「問題が解けるまで承知しません」

なんて、ダメだよ、そんなのは。その困つていゝる現実の中で、もう一つ別の奥の現実をつかむことが福音の世界なんですから。いいですか。

「運命環境を変えなければダメだ」

「というのは、いつまで経つてもダメなんだ、そういう人は死に至るまで。大いにいいかと思つたら、またどっこいダメになつてしまふ。ところが、そういう場合は、プラス・マイナスの相対的な現象が何であろうとも、そのもう一つ奥の世界でそいつをちゃんともう抜けてしまつて、荷なつてしまつていゝる。

「入学試験に落ちた。いや、大丈夫です」

「ということをちゃんと荷なつていゝる人があるわけだ、この中にも。それは本当の勝利者になる。ブラウニングの言葉がある。

“Shall life succeed in that it seems to fail”

〔註：Rabbi Ben Ezra BY ROBERT BROWNING

For thence,—a paradox / Which comforts while it mocks,— / Shall life succeed in that it seems to fail: / What I aspired to be, / And was not, comforts me: / A brute I might have been, but would not sink i' the scale.〕

「失敗したと思つたところで、実はその人生は成功してゐる」

「という。そういう境地が、

「憐れみある者即ち憐れみを得ん」

と。イエス・キリストに憐れまれたる者は、またそこから出てきたところの憐れみというもの、私たちが頂いていゝるところのこの憐れみの事態を、いよいよキリストの憐れみを得るわけです。そして、人に憐れみをわかつわけです。これはしよつちゅう転回してゐる。キリストと交わつていゝると、グルグルグルグルまるで水車みたいなもので、水車の水みたに動いてゐるわけだ。上からおりてくるキリストの水は、我々の水車を回転する。

「我は水車なり」

「という。グルグル回転して、別な水を今度は向こうへ分けてやるわけだ。いい譬えだねこ



の水車というのは。その水車みたいに、我はキリストの水を受けとって、それを他に流してやるという水車の如きものである。あれはいいものだよね。これが、

「**憐れみある者、その人は憐れみを得ん**」
ということ。

●キリストと同質の者

8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

キリストを見たら、心は清くなる。キリストは神の現象体だもの。神の現象体であるこのキリストというひとを見てみると、心は清くなる。……

熱い火の如き光をもったキリストの清さです。瞑想の世界でも、光が出てくると、それはこの世の光と違うものね。心の清き者とは、人をすぐ審さばいて、

「あれは汚れている、濁っている」

だのという、パリサイ的な清さではないよ。

9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。

「平和ならしむる者」は、まず平安でなければ、平和ならしむることはできません、心が平安でなければ。即ち、

「心安かれ、我なり」

という、このキリストとの交わりの世界に平安がある。この平安なくして、人を平和なにかに持つていくことができるものか。だから、「平和ならしむる」という言葉は、「人に平安を与える」ということ。人に平安の境地を与えてやるのが、本当の平和ならしむる者です。

特に京都の人は、「平安神宮」というのがあるから、あれをよく拝んでおこなうてはいかんよ(笑)。私は「平安」という言葉が大好きだから、手紙にもよく表に「平安」と書く。

「何のために先生は『平安』と書いているのだろうか？」

なんて、ダメだよ。

「平安汝にあれ」

と書いて書いているんだから。この頃はあまり手紙を書かないけれどもね、忙しいから。葉書にまだ平安と書いたことがあつたか知らないか知らんけれども。

「平和ならしむる者、平安を人に与える者、その人は神の子と称えられん」

全くその通り。

10 幸福なるかな、義のために責められたる者。

神さまの義を体现することにおいて、あるいは神の愛を体现することにおいて、責められたる者、

天国はその人のものなり。11 我がために、人なんじらを罵ののしり、また責め、詐いつわりて各様の悪あまひしきことを言うときは、汝ら幸福なり。



何と言われてもいいよ。もう毀誉褒貶きよほうへんは問題でない。本当ですよ。この世の毀誉褒貶きよほうへんなんてものは問題でない。誉められようが、貶けなされようが、そんなことは痛くも痒かゆくもない。神さまに喜ばれる、キリストに喜ばれる。

「人に褒められることを求めるか」

なんてどこかにパウロが、キリストも言っていると思つたが、そういうことではない。

12 喜び喜べ、

「喜び躍れ」ということですよ、この「喜びよろこべ」というのは。喜び躍れ、

天にて汝らの報むくいは大なり。

「報いは大なり」というのは、何も因果応報を、いわゆる報いが、ご褒美がくるからやるのでは、本当ではない。自然にこれは恵みとしてやつてくる。天における恵みは大なりということですから、「報い」といつたつて。ユダヤ人はこの「報い」という言葉が好きだ。

汝等みまより前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

この山上の垂訓の大告白は、イエス・キリストがみなそれを自分で体験されたから、それから自ずから生じたところの言葉です。彼は柔和なる者であり、彼は心貧しき、魂の貧しき者です。憐れみある者であり、義に飢え渴いた者であり、心の清き者であり、また平和ならしむる者であり、また義のために責められたる者である。これはキリスト自身の、自分自身の告白です。

だから、このキリストを受けとつたならば、みなキリストと同質の者となるから、そして本当に——さつきパウロの言葉があつた通り——自由自在にその境地に入つて、その人々を救い上げていく。上から、

「こうだ、ああだ。ああしろ、こうしろ」

なんて、命令しているのではない。本当に同じ次元に、立場に立つて、そして行きましようといつて、腕を組んで行く。そういうのがこの福音の自在な柔軟心の現れです。あなた方のお互いの交わりもそういうこと、相助けて行つてください。もはや問題は何もない。

「過去がどうだ、現在がどうだ、未来がどうであろう」

なんて、そんな下らないことを考える必要はない。

「いつもキリストにあつてこうだ」

というわけです。

● 汝らは世の光なり

「汝らは地の塩なり」

という言葉と、

「汝らは世の光なり」

という、このただ二つの言葉を簡単に言いますと、



「汝らは地の塩となれ、世の光となれ」とキリストは言つてない。

「地の塩となるであろう」とも言つてない。

「地の塩である。世の光である」

と言つている。いいですか。私たちはキリストに言われるような「地の塩」でもなければ「世の光」でもないのに、キリストは

「お前は地の塩だぞ、世の光だぞ」

と。これはキリストの本願の力がきているからです。キリストは、

「私の力で必ずお前は地の塩であるのだ。また光となっているのだ。お前の中で私は塩だ、お前の中で光だぞ」

と。これを無条件で受けとつていくことです。

「相対的な自分がどうである」

なんてことを顧みる必要はない。

「ああ、そうでしたか。あなたが私の中で塩でしたか、光でしたか。義でしたか、愛でしたか。あなたは私の中で義となつて下さつて、私の中で愛となつて下さつて、

これはありがたい」

と。それだけです。それでそれから皆さんが本当にそういうふうになっていく。

「生まれつきの私がどうしてこんなことになつたでしょうか」

というようなことに、あなた方一人びとりが自分に驚くわけです。それは、驚く内容はキリストなんだから、限りなく驚いてくださいよ。そして、もう楽しくてしょうがない。こんな福音は他にありはしないですよ。キリストは水を割らずにおっしゃる、

「汝らは世の光なり」

と。

「こういう場合には光である」

なんて言つてやしない。絶対無条件に「光である」と言う。キリストは無条件者だから、その無条件者の中にパツと入つて、そしてどうぞ、光つてください。何もグズグズと妙な考えを起すことはひとつもない。いいですね。

これが山上の垂訓の、ズバリとこの八つのものがちゃんと一つの要に^{かなめ}焦点している。その焦点は即ち、「靈が貧しい」というところに焦点している。十字架によつて本当に靈が貧しくなる。そこから無限なるものが生じてくるから。それが一番深くは「憐れみ」となつて焦点してくる。「心の清さ」となつて、「義に飢え渴く」となつて——もう何でもいい。全部そこは、何もこの八つに限らない——無限無量なものがそこから出てくる。どうぞ、そういうことでもつて、



「何も無くなると何と豊かな世界だろう。本当に人を救い上げていく世界だろう」と。本当に人の憐れみとなる。

「愛しみ深き」という讚美歌をこれから歌おうと思います。おわります。

● 祈り

ガリラヤの北の方の丘の上に群衆がやって参りましたが、あなたは天を仰いで開口一番

「幸福なるかな、靈の貧しき者。天国はその人のものである」

と、なんと素晴らしい御言でしょう。あなたご自身が本当に天父の前にぶつぶれて、靈貧しき者となりました。そうしたらば、

「父よ！」

と、その「父よ」の一言で、父はあなたと一つであります。私たちも、

「主さまよ！」

の一言であなたと本当に一つにされ、この十字架ですつ飛ばされた私たちの中に、あなたご自身が空気の如くに充満してくださるから感謝であります。主さま、私たちは本当に、

「我は空気なり」

と仰るあなたのこの空気を本当に魂が吸って生きております。どこに行きましても、

「我は汝のうちに生き動きまた在るなり」

と。主さま、本当にその通りです。そのようにして、「汝のうちに生き動きまた在る」という、この驚くべき生命を何をもつて代えることができましょう。

「汝らは地の塩なり」

と。然り、あなたの義が私たちを貫いてください。

「汝らは世の光なり」

と。然り、あなたの熱き愛の光が私たちの中に灯火となり、靈灯万里と進んで行くことができますこと、感謝であります。どんな嵐があらましても、どんなに暗くなっても、必ず明るくしていきます。

主さま、私たちは本当に人々を明るくするところの、喜びの炎を立てております。感謝であります。そのようにして、本当にまた憐れみある者となり、本当にあなたの実存に飢え渴く者であり、また本当に「御意のみ」と言つて、小羊の如く慕う者であり、本当にどんなに人に福音のために責められても、逆に人たちを祈りあげて救いあげることのできる驚くべき力をいただき、この本願道のなんと素晴らしいことか。ああ、御名を讃え奉ります。心からの感謝と讚美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

